

福島・光慶寺

地震・原発事故・火災…東日本大震災からまもなく14年

門徒が集い本堂の上棟式

2011年の東日本大震災で大きな被害を受け、東京電力福島第一原発の事故で避難を余儀なくされていた2013年、ろう電による火災で本堂・庫裏・客殿が全焼した福島県南相馬市小高区・光慶寺（白江順昭住職）で11月26日、新本堂の上棟式が行われた。震災からもうすぐ14年、門徒の悲願がようやく形となった。

上棟式には門信徒、建築関係者など45人が集まり、白江住職（70）が讃仏偈をつとめ、全員が焼香した（写真）。

同寺は、東日本大震災で境内が液状化し本堂などは大規模損壊した。さらに2年後の10月に当地を襲った台風の際、無人だった庫裏から出火し、本堂・庫裏・客殿が全焼した。

その翌月、近隣の常福寺を借りて営んだ報恩講で、白江住職は「天明・天保の飢饉で荒廃した相馬藩復興のために、北越や山陰地方などから移住した真宗門徒の心の依りどころとして、1826年に建立された私たちのお寺。2026年の創建200年に向けて再建したい」と門徒に協力を呼びかけた。白江住職は当時を振り返り、「皆さん一同で『必ず再建するんだ』という決意でスタートした。だが、当時はまだ避難指示が解除されておらず、日中だけ立ち入り可能な状態。

避難指示が解除になることを前提にし、再建委員会を結成した」と語る。

住職・坊守・門徒総代などで組織した再建委員会では、限られた予算内での建築を模索し奔走、今年3月

上棟式を終えた門徒からは喜びの声が上がった。門徒総代の梅田光さん（84）は「上棟式を迎えられ、うれ

19日に着工することができた。本堂の本堂は来年7月に完成する予定。並行して内陣荘厳の作業が行われる。すでに2016年に完成した門徒会館の入り口のスロープから、渡り廊下を



「心の依りどころ」再建に喜び

しい気持ちと安心した気持ちの両方。震災からもう14年近く経って、ここまでお寺も私も言葉では言い表せないくらい大変だった。やはり依りどころというのは大切。本堂が再建されればありがたい」と話した。同じく門徒総代の渡邊榮三さん（76）も「ここまで10年以上、今日は来られなかった先輩たちが委員となって運営され、ようやくここまでこれた。その方たちの『本堂再建』という悲願があり、今日の式を迎えられた。お寺は心の依りどころなので、早く完成してほしい。ことを離れていった人たちも、新しい本堂を喜んでくれるのでは」と複雑な表情を見せながらも、梅田さんと隣の席で喜び合った。

小高区は、震災前と比べていまだ半数以上の世帯が戻ってきていない。子どもの進学などで戻らない選択をした若い世代も多い。子や孫と離れて暮らす仏僧会員の平田順子さん（80）は「私たち夫婦は避難指示が解除されたら帰りたい、という一心だった。8年前にようやく戻れたが、その2年後に夫が亡くなった。お寺が心の支えになってくれたので、その死を受け入れることができた。地域には戻ってきた人が少ないから、普段のコミュニケーションはなくなってしまっ

た。でもお寺に来ると、知っている人たちがいて、笑いと元気がもらえる。今日も来てよかった」と仏僧の仲間たちと笑い合った。

白江住職は「200年前、皆さんの心の依りどころとして光慶寺が始まっているので、門徒の声はうれしい。本堂ができたなら、当然次代に繋げなければならぬ。その方法は具体的にすぐに言えるような簡単なものではないが、これからの時代にはこれからの人を対象にしていかなければならない。若い副住職が中心となって次代を背負って続けていってほしい」と長男で副住職の領英さん（30）の背中をたたいた。

領英さんは「これまでお寺を支えてくださった皆さんが安心できるような方策を考えていきたい。一方でこれからの時代、小高に戻ってくる方、移ってきてくださる方々の依りどころとなるお寺作りは難しくなってくる。そこは皆さんと住職に力を借りながら模索していきたい」と語った。